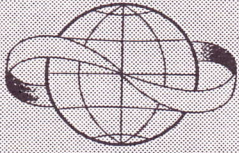


ヴェーナス通信

Venous (静脈) Venus (護美の女神)



第27号

発行 東多摩再資源化事業協同組合
 理事長 紺野武郎 編集長 吉浦高志
 東京都東村山市久米川町1-16-18
 Tel&Fax 042-395-9788

見せかけだけの

拡大生産者責任

先日、コピー機関係の大手販売会社の方が、オフィス古紙の回収をして指定メーカーに運び、コピー用紙にしてまたユーザーに届けるシステムのヒアリングにきた。近年大手企業がこのようなリサイクルシステム作りを奔走している。長野県茅野市や諏訪市では、市と長野日報社の音頭とりで市内の新聞古紙のみを行政回収し、いわき大王製紙に直納、古紙100%の新聞用紙にして地元に戻し配る方法を実施した。回収・加工・搬送コストは市が負担し長野日報社は負担なし。地元既存業者の参加もない。企業の真の目的は販路確保にあり、偽のイメージアップに他ならない。元々何十年も前から地元回収業者が低コストで集め、地元問屋を通して品質や量的な調整をして最も必要としているメーカーに、経済原理で流通していた資源物である。再生製品もまた大きな流通機構を経て全国の販売網に卸されているところ、大手ユーザー（排出元）だけに絞って、特定の業者が特定のルートで特定のメーカーに搬送し、特定の回収資源で無理に再

商品化をした上で、また特定のルートで販売する。

いかにも鮮やかな円運動のように見え流通革命をしているかに見えるが、その過程において大変な無駄と新たなエネルギーの浪費をしていて、しかも既存のシステムや業者を見殺しにしている。

循環型社会とは社会全体が形成した大きな輪の中で夫々の業界が最も経済的に持続可能な活動を成り立たせることではないだろうか。

拡大生産者責任の本質は、誰が処理するかではなく、処理リサイクルの経費を誰が負担するかにある。

「OECD報告書 framework」

つまり処理経費を製品に内部化し、最終的に消費者が選択しコスト負担することにより廃棄物の再資源化を円滑に行うことと、無駄なもの

の消費抑制を導くものである。ところが我が国では、拡大生産者責任の意味が歪曲され、事業者が引き取ってリサイクルすれば達成したと勘違いしているようだ。

振返って見ると、容器包装リサイクル法は莫大な回収コストを自治体に負わせ、生産者の廃棄責任に対する企業努力を減少させている。家電リサイクル法や、パソコンリサイクル、自動車リサイクル法などは、生産販売者自身が新たな回

収・処理ルートをつくり自ら静脈産業部分に参入しようと、その法制化に躍起になってきた。

そこには中古品の再利用や輸出事業などは考えず、新しい製品の販売が目的のリサイクルに徹している。我々資源回収業界の歩んできた歴史を見ると、びん・缶・廃家電・廃自動車すべて大事な取扱い品目であった。しかし回収した資源物の価格は暴落し、プラスチック部品の増大で採算がとれなくな

って放棄せざるを得なかった。各廃棄物の中に処理コストが内在していれば、法律で処理ルートや方法を強制しなくても、回収業界やそのネットを通してリユースやリサイクルの大きな円運動が再興するはずだ。また清掃行政が多額の税金や職員を使ってリサイクル事業に苦しむことも無くなる。

再処理困難物のみのルート確立と処理ルールを徹底して、誰でも参加できるものにして頂きたい。

そして巨大な動脈産業に匹敵する静脈産業を育成する法律や政策の変更を切望する。そのためには、見せかけだけの拡大生産者責任ではなく、生産・販売業者や輸入業者が処理のコストを全額負担し、真の循環型社会作りに取りかかる必要がある。

(T・K)

市民と共に歩んで、

設立から一〇年目を迎えました

去る平成十五年六月二十八日(土)、パレスホテル立川において、東多摩再資源化事業協同組合一〇周年記念式典を開催致しました。小平市長・東村山市長はじめ行政関係、市民代表、関連業界団体等多数のご来賓の方々のご臨席を頂き、組合十年間の歩みを報告しました。一年がかりで準備にあたった組合員一同もさらなる努力と団結を誓い合いました。

「本日は、ご来賓の皆様におかれましては、ご多忙の所、当組合の一〇周年記念式典にご出席を賜り、誠に有難うございます。只今より、東多摩再資源化事業協同組合の一〇周年記念式典の開会を宣言致します。」と開会宣言が行われた。

続いて、日本紙パルプ商事(株)材料部長・脇坂義則氏による記念講演会が行われた。(講演内容の詳細は四・五・六頁に掲載)

〔記念式典〕

●紺野理事長挨拶

記念講演会終了後、引き続き記念式典が行われた。はじめに、紺野理事長が、「お陰をもちまして東多摩再資源化事業協同組合、創立一〇周年を迎えることができました。

これも偏に皆様のご指導・ご支援の賜物と感謝申し上げます。同時に、先輩諸兄の数々のご苦

勞ご功績を再認識し、新たな一〇

年への勉勵を誓ったところであり

ます。さて、組合創立時の一〇年前を振り返って見ますと、一五名の組合員は皆活発に営業しており、互いに良きライバルとして競い合い切磋琢磨していたのですが、結局一人では一五分の一の仕事しか出来なかつたように思います。全員の設備・車輛・人材・技能を出し合つて組合事業としたことによつて、一五分の一五ではなくて、一五分の三〇、一五分の四五の仕事が容易に出来るようになり、誰にも負けない競争力と省資源・省エネルギーの地域リサイクル事業が可能になったと自負して

います。その時どきの環境や条件の中で、最大限可能な最高の仕事をしよう」を合言葉に「市民の皆さんに応援してもらえる組合作りをしよう」と活動して参りました。手作りの情報誌「ヴィーナス通

信」の発行もそんな思いから始まりました。正しいリサイクル情報を集めて、市民や行政の皆さんと一緒に議論できる環境作りが出来ればと願っています。青年部も発足し、ホームページ製作などに大いに活躍をしてもらいました。

何卒、今後とも倍旧のご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。」と挨拶した。



記念式典で挨拶する紺野理事長

●祝辞

小平市長・前田雅尚様

「東多摩再資源化事業協同組合設立一〇周年、誠におめでとうござ

います。貴組合は、私共小平市をはじめ多摩地域の再資源化事業に大変御協力を頂いております。リサイクル事業は、行政・市民・業者の相互の協力なくしては成り立ちません。

〔開会宣言・記念講演会〕

最初に、一〇周年記念式典実行委員長の高浦高志専務理事より、

貴組合におかれましては、今後とも再資源化事業におきまして、我々行政・市民と尚一層の御協力を頂くよう御願致しますと共に、貴組合のますますの御発展をお祈り申し上げます。」



小平市長・前田雅尚様

東村山市長・細淵一男様
「東多摩再資源化事業協同組合設立一〇周年、誠におめでとございます。」

二一世紀は、中央集権体制の中で物を作り経済体制を築く時代が終わり、それぞれの地域で自分たちが責任をもって生きていく時代であります。

もはや、従来のような責任を転嫁したり、権利意識を強調する時代ではありません。

このような新しい時代の中では、力のあるものを結集して、情熱を

燃やした時にこそ力以上のものが発揮されることになり、その意味では、東多摩再資源協のような組合の存在は非常に大きいものがあります。

この新しい時代において、貴組合がますます御発展を遂げられますようお祈り申し上げます。」



東村山市長・細淵一男様

この他、当日御出席頂いた御来賓を代表して、小平市環境部長・菊地哲矢様、東村山市環境部長・櫻井貞雄様、東久留米市環境部長・内田國夫様等の各市環境部長、東村山集団回収を楽しく進める会代表・田原久子様、古紙問題市民行動ネットワーク代表・中村正子様等の市民代表、元衆議院議員・中小企業振興センター代表・常松裕志様等の業界代表、東京都中小企業団体中央会事務局長・中島力

様、多摩リ団連代表幹事・土方十四江様等の関連団体代表などの方々から御祝辞を頂いた。

〔祝賀懇親会〕

記念式典終了後、引き続き祝賀懇親会が行われた。はじめに(株)資源新報社代表取締役社長・太田原秀義氏に乾杯の御発声をしていただいた。

この中で太田原氏は、「これからは、資源循環型社会の構築の中で、再資源業界の専門的な機能を使って経済性のあるリサイクル事業が展開出来るかが課題であり、その意味で貴組合には、今後ともリサイクル業界としての役割と責任をしっかりと果たして頂くことを大いに期待しております。」と挨拶を頂き、懇親の宴に入った。

祝賀懇親会の最後に、東資協副理事長・新井英一氏による祝い締めが行われた。

この中で新井氏は、「再資源業界を育てるためには、ベテランの経験・技術・ノウハウと若い力の協力は大変大事であります。東多摩再資源化事業協同組合が、ベテランの力と若い力を駆使してますます発展される事を願っております。」と挨拶し、一本締めで祝い締めを行った。

続いて、藤本副理事長が、「我が組合は、今年で設立から一〇年を迎えましたが、次の一〇年以降も美しい地球を守り、人類の幸せを守るために、環境問題に対して正面から立ち向かっていく業界として、頑張っていく所存であります。

本日は、お忙しい所あるいは休日を返上して、我が組合の一〇周年記念式典に足を運んでいただき、お祝いをしていただきました。誠にありがとうございます。」と閉会御礼の辞を述べて、東多摩再資源協一〇周年記念式典は無事終了した。

尚、当組合では設立一〇周年を記念して『東多摩再資源協一〇年史』を作成しました。

平成五年の組合設立以前から設立後一〇年間の組合の歩み、組合機関紙「ヴィーナス通信」にこれまで掲載した主なリサイクル情報記事、各組合員の生い立ちを紹介した「私の履歴書」シリーズなどを掲載しています。

また、組合一〇年史の作成に当たりまして、小平市・東村山市・清瀬市・東久留米市・西東京市の各市長様、並びに東京都中小企業団体中央会の会長様より貴重な御祝辞を御寄稿頂きました。厚く御礼申し上げます。

一〇周年記念式典講演

『海外の古紙事情—製紙原料古紙とアジアの動向』

日本紙パルプ商事(株)貿易営業本部原材料部長 脇坂義則氏

①世界の紙・板紙の現状について

世界の紙・板紙の消費量は、過去二〇年間で年率三・三%の伸びを示し、その間約一億五千万トン増加しました。現在では、約三億三千万トンの消費量となっており、今後も成長し続けると予想され、二〇一〇年には、年率二・九%、数量にして約一億トンの増加となり、約四億二、三千万トンに達する見込みです。

品種的には段ボール原紙、印刷筆記用紙の伸びが大きく、新聞用紙は低成長にとどまる模様です。

(表1)

地域的には、日本を除くアジア市場において、紙・板紙の消費量は急速に成長し、間もなく北米と肩を並べるか、追い抜くと見られます。

②中国の紙・板紙事情について

成長するアジア地域の中でも、中国が、紙・板紙の生産・消費の中心になってきています。

中国は、二〇一〇年まで経済成長率年七〜八%は間違いのないと思われ、上海を中心とした浙江省・江蘇省などの長江デルタ地帯の人



日本パルプ商事(株) 原材料部長脇坂義則氏

口は一億四千万人、一人当りのGDP(国内総生産)は三千三百ドルとマレーシア並みです。人口はマレーシアの十倍ですから、十倍の経済力を備えております。(中国全土平均では九百ドル)

中国の紙・板紙の国内消費量は、一九九〇年までは日本の約半分でしたが、一九九七年には、日本を上回り、その差は年々拡大しています。

今後数年内に、一二〇〇万トンのマシンが稼動する計画があり、そうになると八〇〇万トンのパル

プ・古紙が必要になると思われます。

一方で、中国のパルプ輸入量は、二〇〇二年現在約五〇〇万トン(五年前の約三・五倍)で、日本の輸入量(約二〇〇万トン)の二・五倍となっており、四年後の二〇〇六年には約六五〇万トンまで増えるものと思われま

す。また、中国の古紙の輸入量は、二〇〇二年現在で、約六九〇万トンとなっており、米国から半分以上輸入しています。(表2)

中国の製紙会社は、かつては二〜三万社位あったものが、現在は約四五〇〇社位に減ってしまいました。

これは、非木材パルプ「わら」などを原料として使っていた小規模な工場が、環境問題による「わら」の使用禁止で閉鎖されたこと、中国政府によるクリーンな製造工程の形成のための技術開発・人員増員方針、工場規模の大型化などが要因です。

二〇一〇年には、非木材原料の比率は、二〇〇〇年の四〇%から二四%まで低下し、木材原料は一九%から二八%、古紙が四一%から四八%にアップするものと見込まれます。

古紙回収は、現地回収が進んで

おり、その経営も国営から民営にシフトが移行しております。中国の昨年の古紙消費量は二千万トンのうち、国内回収量は千三百万トンで、輸入は前出の六百九十万トンです。

集荷業者の数は多いが、未発達で大規模業者が少なく、自由放任、かつ低いビジネスマナーのために古紙の品質が低下しています。このため、意図的に水をかける「水増し」を図るケースも少なくありません。

古紙価格は、市況、需給バランス、生産状況といった要因と共に、投機的要素で変動しています。

このようなことから、世界の製紙原料事情は、今のところ中国によって振り回されている感が強いと思われま

③世界の古紙事情について

日本を除くアジア地域の古紙消費は、きわめて早いスピードで増加しております。(表3)

古紙回収率を見ると、アジア地区の多くの国では、古紙回収率が低く、輸入を必要としています。

世界的に見ると、GDPの伸びに比べ、古紙回収率が伸びていません。

これには、その地域の国民の廃棄物の管理・環境への配慮の意識の高さと消費の増加といった要因

があります。

また、古紙価格は、低所得国においては集荷業者間の競争から、その国の物価水準に比較し、かなり高い対価を、事業所や家庭といった発生元に支払っています。一方、所得水準が上がるに従って集荷コストの上昇と相俟って、発生元に支払う対価は低くなると言えます。

次に、世界各地域の古紙回収に対する意識をみてみます。ヨーロッパでは環境意識・産業界の主導・生産者責任の確立、米国では環境危機意識・条例の制定、日本では環境意識・韓国では高いゴミ処理費用、北京・上海を中心とした中国では行政主導による環境意識の変化などが、それぞれの地域での古紙回収に対する意識を誘発する要因になっております。

④米国の古紙事情について

米国は、国内で古紙を四五〇〇万トン回収しており、このうち、約一〇〇〇万トン（約二〇％）を輸出しています。中でも、アジア地域に六〇〇万トンを輸出し、中国には、そのうちの三四％を輸出しています。また、カナダ・メキシコには約一〇〇〇二〇〇万トンを輸出しています。

米国とアジア地域は、古紙にお

いて補完関係となっております。

なかでも、ナインドラゴン（本社・広東市）の親会社で、かつ米国での古紙調達会社・アメリカカチユンナムは、米国の古紙需要家の競争相手として急成長し、現在年間二五〇万トンの古紙を扱うようになっていきます。

ナインドラゴンの二〇一〇年までの増産計画が全て実行されると、抄紙機十五台で五〇〇万トンの古紙を消費する見込みであり、まさに古紙を食べるモンスターといったところで、これが世界の古紙市場に与える影響について今後注目するところとす。

⑤古紙の回収量について

現在、世界の古紙の回収量は、二〇〇〇年の時点で一億五千万トンです。これが、二〇一〇年には、約二億二千三百万トンで約七〇〇万トンの増加になると予測されます。

このうち六〇％の回収は、現在の回収率で増加する古紙の消費量から賄われますが、残りの四〇％の回収には、回収の効率化や新たな回収方法の確立などが必要となり、それではなければ、古紙は不足することになるでしょう。

⑥日本の古紙事情について

日本では、パルプの生産量が横

ばいか減少しています。またパルプの消費量や輸入も年々減少しています。

一方、古紙は、一九九七年が一六五〇万トン、二〇〇一年が一七〇万トン、二〇〇二年が一八一五万トンと消費量が増加しており、原料の古紙転換が進んでいます。

古紙の回収量は、一九九〇年までは大きな変化はありませんでしたが、一九九七年以降は、急激に増えており、二〇〇二年現在で回収率は六五・四％となっております。

日本では、一九八三年頃には、古紙を年間八五万トン程度輸入していましたが、回収率のアップした一九九七年頃から輸出が目立ち始め、二〇〇〇年には三〇万トン、二〇〇一年以降は回収率の一〇％を輸出するようになるなど、古紙の輸出が増加しています。

⑦まとめ

以上のことをまとめますと、今後十年で、世界の紙・板紙の生産量は、三億三千万トンが一億トン増え、四億三千万トンになります。原料構成面では、古紙の比率が現在の四五％が四七％に上昇します。世界の中でアジアのシェアが、

紙・板紙の消費・生産ともに増加してゆきます。特に古紙の使用比

率はアジアにおいて六〇％と高く、従って、ますます古紙輸入量は増えて行きます。

米国の古紙は、アジアへの供給面において、量だけでなく質的にも、バージンファイバーが多く、繊維強度があるという長所を持つので、今後とも重要な供給源であり続けることが予想されます。

アジアでの紙の消費量の伸びは、アジア域内での古紙回収増につながりません。この域内での古紙回収が進まないと、大変な原料危機になることが考えられます。

以上のような世界的な環境下にあつて、今後、日本の古紙の国内市況は、いままでのような世界の市況と無縁とはいきません。

また日本の古紙問屋は、輸出によつて販売の選択肢が増えました。販売は、古紙ヤードの地理的な環境にも左右され、また国内のメーカーへの供給が優先されようが、かなり自由な裁量で輸出が検討されることになるでしょう。

価格は、国内と輸出の両睨みで決定される場面が増え、内外の価格差が縮小してゆくことになりま

す。世界の古紙需要は、底堅いものになっていきます。供給面から見ても、市況が強くなる要素がありま

今回は、主に日野市の現状について報告があった。日野市では、資源物がステーション回収だった時代には、抜き取り業者が、近隣の間屋の貸し車を使用してまで抜き取りに来る位に、資源物の抜き取り行為が非常に多かったという。近年、収集方法が個別収集に変わってからは、以前より減っては来たが、それでも未だに無くなっていないらしい。地元自治会では、行政回収の資源物を出すときは、住宅の玄関先など敷地内に置いておくこと、行政回収の資源物に抜き取り禁止の貼り紙をしておくことなどの対策をとって、抜き取り行為を防ごうと努力しているそうだ。

次に、パネリストの方々とお会場の参加者との間で全体討論が行われた。この中で、参加者から、「抜き取り行為の対策に関して、行政・回収業者・市民との間の連携や仕組みが不完全である。」とか、「回収業界は、抜き取り行為を阻止するために、本当に抜き取り業者と正面から話し合っているのか」などの意見や質問が出された。これに対し、資源回収業界は、「私達は、今まで、抜き取り業者に対し抜き取り行為をしないよう再三注意をしたり、正面から話し

合いを持つとうとした。しかし、抜き取り業者側が、『行政が資源回収に携わったことで、我々のチリ紙交換員としての仕事を奪ったのだから、責任は行政にある』などと言って、相変わらず話し合いに応じる姿勢を全く示さないの困っている。」と批判していた。

また、行政は、「このような抜き取り行為の問題が発生したことについては、行政の資源回収を推進することを重視し、抜き取り行為対策を怠った我々行政の姿勢にも責任があることは痛感している。そこで、この機会に我々行政が自らの役割を問い直し、市民や資源回収業界と三位一体になって抜き取り行為対策に真剣に取り組めるシステムを整備していきたい。」と回答していた。

結局、今回のフォーラムでは、根本的な抜き取り行為対策としての結論は出ず、テーマの通り抜き取り行為の現状について考えるに留まった。その中で、行政・市民・資源回収業界が一致協力して、この資源物抜き取り行為の問題を解決していくことで、円滑な資源循環システムの形成・維持へと繋がっていくということが、パネリストと会場参加者の総意としてまとめられ、終了した。

(柿崎)

古紙に新たな禁忌品

(製紙原料にならない物) 出現!

捺染紙「ナツセンシ」^④あらかじめ色糊(昇華型染料を混ぜた糊)が塗られた紙で、これをアイロン等で布に転写するとTシャツなどに簡単にプリントできるもの。

最近パソコンショップなどで『アイロンプリント紙』などとして大量に売られている。

見た目には、色印刷した上質紙で古紙として処理してしまう。

しかしこの古紙を、板紙(ボール紙)の表面近くに化粧紙として再生使用すると、製品化して2〜3週間後に異様な模様(あじさい化現象)が浮き上がってくる。

製紙メーカーの最終工程にあるドライヤーの部分(140度程度)でトラブルが発生するのかもしれないからそうではないようだ。

160度以上で転写するらしく板紙原紙の段階では現れなく時間が経つと出てくる。

つまり製品を入れた紙箱などになって店頭に出てからトラブルの、問題は深刻になっているようだ。

暖めると発泡する発泡紙(点字

用などに使用)もそうだが、他の古紙に紛れ込むと業者でもまったく見分けが就きにくいため、そのような紙を使用した人は、必ず焼却処理をして頂くようお願いしたい。

(T・K)

回収業者は

「分ければごみ」

「分ければ資源混ざればごみ」というが、古紙などの回収資源が業者の手に渡ると話が変わる。

回収した古紙は古紙問屋のヤードで最終的に手選別して不純物を取り除きプレス加工する。

分別すればするほどごみやグレイドの低い古紙が出る。

ごみは一転して産業廃棄物になる。

ちなみに産業廃棄物は、kgあたり五〇〜八〇円の処理料がかかる。

新聞と折込チラシ一ヶ月分で一三kg程度。

この中に一kgのごみが混入していれば、殆どただ働きになってしまう。

ごみが有料化になっても、古紙の中にごみや禁忌品を絶対に混ぜないで頂きたい。

私の履歴書

紙パ資源株式会社

社長 森田敏雄

私が主要な製紙原料である「古紙」の商売に初めて係わりを持ちましたのは、約二十五年前のタイ・バンコクでの駐在の時でした。当時タイ国は、紙、板紙の製品輸入国であるとともに、原料でも自給できず、大半を輸入に依存しておりました。

当時から古紙は、大部分アメリカからの輸入でしたが他国からも積極的に買い入れをし、売り込みを致しました。その間様々の経験をしました。

「ニュージールランド」からの「新聞古紙」ではタイでのプロバガンダの規制により破砕品でなければ輸入が出来ないに拘らず、残紙状態の荷姿で持ち込んでしまい、ユ一ザーの機転のお陰で無事通関出来たこと、ホンコンからの「雑誌古紙」では現地での立会いによる品質チェック完了品を輸入したにも拘らず、開梱したベールの中からは水分を十二分に含んだ大きな紙塊、瓶、缶詰のオンパレードでした。勿論大クレームです。

この様な海外での古い体験から私の「古紙」ビジネスは、始まり

ました。

私は昭和十五年、山紫水明の地宮崎市で生まれました。父母ともに愛媛県宇和島の出身で、昭和の初めに宮崎へ移住、二人共に教職に就いておりました。

高校卒業後、叔母を頼って神戸に向かい、特に特別の理由なく父親学んだと同じ大学に進み、就職後も大阪勤務で延べ十五年間を関西で過ごしました。

勤務先は「紙は文化のバロメーター」の文言に惹かれ日本紙パルプ商事(株)の前身の中井(株)大阪支店に昭和三十九年入社しました。

十年の勤務の後、第一次オイルショックの直後、環境を変えたい一心で、会社の海外研修制度に応募し、ニューヨークに半年間遊学、帰国後貿易営業に配属されました。自から志望しての貿易営業でありましたので、とにかく真面目に語学(英語)に没頭しましたが、如何為ん三十歳を過ぎて始めたこともあり、大変な苦勞を背負うこととなりました。

二年後にバンコク駐在を命ぜられました。その時の駐在時代の勤務体験が前述の「古紙」ビジネスであります。当時タイ駐在時の使用言語は、英語70%、タイ語20%、中国語10%でした。幸い

にローカルスタッフが居たこともあり殆ど英語で事足りましたが、その英語については恥かきの連続でした。

四年の勤務後帰国、駐在時代の無理が祟ってか体調を崩し、国内勤務を希望致し、折からの円高時代の始まりもあり、輸入の管理業務の担当となりました。

その後体調も戻り再び貿易の実務業務に復帰することとなり様々な分野を経験出来ました。情報関連用紙、建材向、電材向特殊紙の輸出業務、製紙原料・薬品等の輸出入業務、中国での製紙メーカーとの合弁会社の設立、活動拠点作り等々であります。

その後平成十一年一月社命により現在の紙パ資源に転籍、同六月に社長に就任致しました。

日本紙パルプ商事(株)で過した約三十五年は長いようであつという間に過ぎた年月でありました。

国内営業十年、貿易業務ほぼ二十五年、家族共々海外生活を経験し、また業務出張を含めて世界の約三十カ国を訪問することが出来ましたことは大変貴重な体験でありました。

その間に強く感じました事は、たとえ言葉が十分に通じなくとも、意気があれば心は通じ合うという

ことでした。

そこで暖かい人間関係が出来て、結果として業務の目的も達成することが出来たという思いがあります。

以上簡単ではありますが、私の経歴を略述させて頂きました。以上



タイにて

●ニツ塚・谷戸沢処分場を見学

当組合青年部では、市民連邦の江尻京子さんのお声がけの下、東資協青年部員で日野支部の土方道明氏、原宣仁氏、原哲也氏及び多摩リサイクルセンターのアルバイトの大学生中村浩太郎君とともに多摩リサイクルセンターの展示ブースのリニューアル作業に参加している。去る四月四日に初めて現地に訪れ、現状の問題点や、効果的な展示の仕方、今後の作業の進め方について話し合った。その後、メールでのやり取りをしながら打ち合わせを進め、七月一二日に第二回の打ち合わせを現地で行った。

同三日(木)、ごみと資源の流れを最終処分場から遡って考えようということ、多摩地区のごみの終着駅であるニツ塚処分場に見学へ行った。見学に際しては、東

村山市ごみ減量推進課より小山指導員、長谷川指導員両氏にご同行頂いた。ニツ塚処分場は、この一〇月には第一期の埋め立てを終え、第二期の埋め立てに入ろうという時期であった。まず始めに、施設内で担当者の方から設備などについての説明と、ビデオをみせてもらった。

設備では、私が一番気になって

いた「雨水などによって出てくる汚水」を出さないため、「貯めない・漏らさない・見逃さない」といった徹底した設備が整えられていた。

まず貯めない為には、区画提というのが設けられ、それと滲出水を速やかに排水する「滲出水排水管」が通っている。

そして漏らさない為には、遮水溝。この構造は、水を通さない為や、埋め立てた上を通るダンブなどの走行による影響を防止する役割をしている。この層の中にはいつて「遮水シート」を実際に見せてもらった。思ったよりも厚さがなく、心配に思えたが、話を聞いてみたところ、強度や耐久性に優れている、信頼性の高いシートということだった。

そして、「見逃さない」仕組みについては、モニタリングシステムというのが使われている。これは、万が一、遮水シートが破損して滲出水が漏れたとしても、全体に配置されているモニタリング専用管から電極によって破損部を探知し、速やかに止水材が注入され、止水されるといふ驚きのシステムだった。

このように、思っていた以上に自然環境への対応や、漏水防止シ

ステムなど災害設備が整えられていて、少し安心した。

次に、処分場の周りを車で案内してもらい、最後に埋め立てが終



ニツ塚処分場見学隊

了した谷戸沢処分場のなかを歩いた。

説明では、谷戸沢に生息する生物も清流復活用貯水池を造ったことにより、造成前と変わらず鳥類などが生息しているとのことだ。

実際にいってみても、カラスも見あたらず、雑草や花もきれいはえていた。今はグラウンドなど、土地を再利用しているという話だった。

こうしていくら自然が戻って来たとはいえず、元の自然と変わらなわけじゃない。これからの活用や、残されているガス抜き土管、そして100年〜200年と適切な維持管理をし続けていかな

ければならない問題。

私たちが生活していくその裏側で、自然はどんどん傷ついていく。今回見学したニツ塚処分場や谷戸沢処分場は、生き物や自然への影響を最小限に抑えながら運営しているが、やはり多少なりとも自然には迷惑がかかる。しかし、人間は自然がないと生きていけないのだ。この自分勝手な人間のエゴを早く変えていかなければならないと強く思った。

ごみ問題を解決するためには、私たち一人一人が自分たちの出すごみに責任を持たなければならぬのだ。正しく分別し、ごみ自体を減らしていかなければならないと、思いを新たにし、また、三多摩廃棄物広域処分組合加盟の二十五市一町の市民の方々とも交流を深め、多摩リサイクルセンターの展示ブースや、これからの青年部活動を通して、私の感じた危機感やごみの減量の必要性を訴えていきたいと思う。

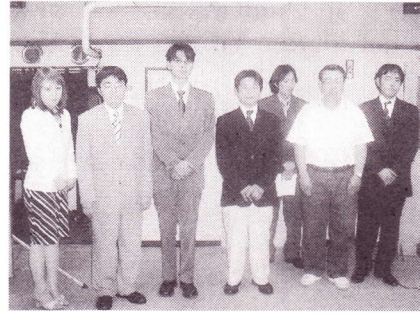
(青年部 白戸 亜矢子)

●第一回青年部総会開催

去る五月三〇日(金)、東久留米の川松にて青年部第一回総会が開催された。

各議案の審議の後、『家庭ごみの

有料化』、『一〇年後のリサイクルシステム』についてパネルディスカッションを行い、若い頭脳でアイデアをぶつけ合った。



総会を終え、一安心の部員一同

続く懇親会では、部員一同来賓を接待し、また相互に交流を深めた後、三月にリニューアルした組合ホームページと五月に開設した青年部のホームページのプレゼンテーションを行った。

(青年部 幹事 紺野琢生)

行事・行動

【六月】

- 三日：一〇周年準備委員会
- 五日：一〇周年準備委員会
- 一日：段ボールR協議会
- 二日：古紙センター業務委員会
- ：定例理事会
- 一四日：古紙ネット・シンポ

- 一七日：中央会・金融委員会
- 一九日：多摩R団連・幹事会
- 二〇日：小平RC安全会議
- 二二日：日資連熊本大会
- 二三日：小平市廃棄物減量審
- ：青年部会議
- 二五日：一〇周年準備委員会
- 二六日：中央会役員会
- 二八日：東多摩再資源化事業協同組合一〇周年記念式典

【七月】

- 三日：古紙循環プロジェクト
- 四日：新日鉄君津工場プラスチックリサイクル施設見学
- 九日：業務委員会
- 一日：定例理事会
- 二日：多摩R団連フォーラム
- (バルテノン多摩)
- 四日：小平市集団回収懇談会
- ：西東京業者会議
- 五日：財務委員会
- 一八日：小平RC安全会議
- 二三日：広報委員会
- 二四日：リサイクルシステム議員懇談会(衆院議員会館)
- ：多摩R団連幹事会
- 二五日：家族リクレーション
- 二六日：日資連理事会
- 二八日：小平市廃棄物減量審
- ：青年部会議
- 三一日：古紙センター業務委員会

【八月】

- 四日：広報委員会
- 九日：関資連理事会
- 一日：定例理事会
- 一五日：広報委員会
- 二〇日：小平RC安全会議
- 二一日：多摩R団連幹事会
- 二三日：東京とことん討論会
- 二五日：青年部会議

リサイクル川柳

なんでだろうシリーズ

◎びんが消え ペットが増えて
三R(?) ↓不循環基本法だべ

◎中身より十数倍する
回収費 ↓ペットボトル等など

◎紐かけて 袋に入れて
ガムテープ ↓過保護な古新聞

◎ビニールに入ったままの
宅配誌 ↓読んだ形跡全く無し

◎古紙の中に スリッパ・包丁
漬物石 ↓お金以外入れないで

◎新聞の 収納袋 なぜ茶紙
↓新聞古紙に茶紙が混ざれば禁
忌品。もう勘弁してよ朝日新
聞さん

(改修業者)

編集後記

盛夏の時節ながら、今年は冷夏と長雨の影響が心配です。

景気が今年後半から少しずつ上昇していく予想が出ていた。一〇年ぶりの悪天候が景気を悪いほうにひっぱらないように願っているのだが、青果物、ビールなど飲料水向けの段ボールの売れ行きが悪く、板紙関係が心配だ。アジアへの古紙輸出が今のようには活発に行われていないころは、古紙のだぶつきと、値下りを懸念したものが今は、だぶつくことは考えにくく、古紙輸出を今後さらに増大させて行く為にこれからは品質にもっと注意していきたい。

先日、中国の商社の方からクレームについて話を伺った。新聞古紙を契約したのに、コンテナ一五本すべての中に雑誌古紙が三分の一も混入していた。

また、両面ビニール引きの地図用紙の裁落で、溶かしても紙繊維が出てこないような産業廃棄物を輸出していた業者がいる。当然損害賠償を請求された。伺っていて恥ずかしくなった。これからも組合輸出事業では品質に責任を持って進めていかなければと痛感した。

(吉浦)